

自蹊庵便り

令和八年 弥生

NO 179

暁の茶事 昔仕事 今仕事

今年の暁は、大徳寺瑞峯院にて三日間、

千葉東金にて二日間にございました。

大徳寺にては、早朝二時迄に瑞峯院餘慶

庵に入り、準備にとりかかります。

来年よりは、京都は夜咄と暁の茶事だけは、八瀬のまなびやにてと考えております。

なぜならば、暁においては夜の間に手焙りなどの灰を温めておく必要もあり、早朝からの働きでは、手焙り、足元火鉢、煙草盆、露地行灯、小灯等々、なかなかのごさいます。

レギュラー会員の皆様もよくよく心を働かせて調べてはくさいます。極寒の深夜、蠟燭の中での働きには、余裕を持つて一つ一つに心付けをしての働きでなくては、怪我のもと、大きな事故や火事に繋がりがねません。暁の茶事もやり続けて二十余年、たいした事故もなくやってこられたのは、レギュラーの皆様の働きもさることながら、神様の御加護によることと、心秘かに手を

合わせております。

夜咄が仕上げの茶事と云われるほどならば、暁はそれを越えたところのいかにも茶人好みの究極の心遊びの茶事と言えましよう。昔の暁と云えば、南方録に利休さんが

津田宗及さん達をお招きしての暁のくだりが載っておりますが、茶事とは濃茶の一杯を如何にお持て成しできるか。火相と湯相に始まり、火相と湯相に尽きると思っております。ゆえに宗及さんは達者な利休さんの働きを見せてもらいたく、他の客より一刻ほど早く出かけられたのでは？利休さん

もその心を読んで、入口を一寸ほど開けておき、見えたならすでに煮えたぎっている茶の湯で一服差し上げます。まさに理にかなった前茶です。ゆったりと咄をし

足しておかれたのです。利休さんが新しい水（醒ヶ井の水）に入れかえた濡れ釜を持って入り、宗及さんの炉の働きにいたく感動なされたという物語です。

そこで思うのですが、水を汲みに行った手代（影の人）は、寅の刻（午前三時〜午前四時）の水を汲んで戻ってこられる。このくだりを想像いたしますと、極寒の深夜のこと、雪かもしれない中を徒歩で水汲みに行くという行程に想いを巡らすだけでも暁の贅沢さが偲ばれます。

今の世には不可能この上ないことにはございますが、なぜその時刻の水でなければいけなかったか、陰分の水が陽に満たされたその若水こそが暁の何よりの御馳走であったのではないのでしょうか。清華水として最も尊い水の世界のこだわりがそこにあつたように思います。

今の世には再現のしようもございませんが、今には今に合った心働きの有り様もありましょう。寄付にての汲み出しは時には

瓶かけにて鉄瓶を用意したりもしますが、その傍らには小ぶりの炭斗を添えて置かれるのも一考です。先客が炭を足し添え、連客がいらした頃に、温かい白湯をお出しする、そういった心得がお客様側にあるのも、客は亭主を思い、亭主は客を思うという働きの一つかもしれませんね。

極寒の夜咄や暁には、よく温かい甘酒や金柑シロップなどのお湯割りをお出ししたり、夏には冷たい梅ジュースでお持て成したりと、今^{いまよう}様の姿をときおりお見受けいたします。今に合った持て成し方とも思いますが、やはり余り甘いものは後の懐石、濃茶にも味的にさわるようにも思われ、やはりお茶の一杯は水が命に^ございます。

水をよく吟味し、釜をよく育て、寄付でのよく煮え立ったこなれた白湯は誠に甘露に^ございます。

その昔のお客様はこれはこれは後の一服が楽しみなことだ…と、思いをはせながらの席入りではなかったかと…。

想像するだに胸のときめきを感じます。阿吽の呼吸とまではいかなくても、場数を踏むほどに、数の分だけの知恵を賜るのが

茶事に^ございます。今年の暁は東金にて初日にしつかりと雪に見舞われ、暁の風情一段も二段も増しての御馳走となりました。

先人たちが良く云われるところの雪の^{あした}朝を置かずという言葉、身をもって解ら

せて頂いた暁のご褒美に^ございました。

私一人の喜びでなく参加者の皆さんが厳しい寒さの中、深夜からの働きを勤しみつつ共に予期せぬ雪景色をまさに降って湧いた御馳走を心から楽しまれていたことが殊の外嬉しゅう^ございました。

京都からの帰路が一日違えば、いえ半日違っても雪の御馳走は馳走にあらず、家に辿り着くことさえ出来なかったことを思うにつけ、ああここでも神様は守られ用意されていた一日であったことの不思議を思うのです。

神仏の御加護なくしては一日、一時の恵

みももたらされないことと、そつと手を合わせた今年の暁に^ございました。ご褒美は更に翌日に続いていたので^ございます。十一日の祭日お招きいただいた茶事にお伺いした折、戸を開け、一步足を踏み入れたところ、雪解けの水に洗われた、それはそれ

は美しい見事な敷松葉に^{いざな}誘われたので^ございます。生かされて今日一日のご褒美としては余りにも贅沢な…ああ茶事をやり続けてきて良かった。これ以上の馳走が他に^あろうか…。と、雪解けの洗礼を受けた、ふつくと水を含んだ敷松葉の馳走は、今日という日でなければ出会えなかった、今という時ならばこその一瞬の命のきらめきの芸術に^ございました。

一踏み一踏み飛び石を歩む幸せに酔いつ茶室に進めば御亭主の心入れの深さに終日酔いしれ、汲めども尽きぬ茶事に^ございました。感動という心土産、時がたつほどにじわつと深く静かに心深く届きます。傘寿の祝いの折、生前葬も終わっています。今日という日のこの上ない贅沢な茶事は冥土の土産といたしましょうか…。合掌

一枝庵にての茶事 感動二首詠めり

く残雪に洗われし露地の敷松葉

にぶき光を 終日保つ

く日の本のあじわいと知れここ露地に

ここ茶室にも 涙を落とす

令和八年二月十一日

鶴女